



成城大学学芸員課程ニュースレター

Newsletter from Curator COURSE of Seijo University

MARCH 31, 2023

vol. 07

seijouniv.

CONTENTS

- § 1- 巻頭言「学芸員という職業」
成城大学文芸学部教授学芸員課程委員会幹事 岩佐光晴
- § 2- 学芸員名鑑第7回
「続いていく仕事に」
大倉集古館主任学芸員 田中知佐子
「渋谷区立松濤美術館における学芸員の仕事」
渋谷区立松濤美術館学芸員 野城今日子
- § 3- 成城大学文芸学部教授 小島孝夫
- § 4- 編集後記



学芸員資格取得要件（文芸学部生のみ対象）

成城大学で学芸員資格を取得するためには、まず学芸員課程に登録し、各種ガイダンスに出席したうえで、①と②を満たす必要があります。

- ① 「必修科目」19単位、「選択科目」を2系列以上にわたって8単位以上修得
- ② 学部を卒業（学士の学位を取得）する

大学院生の場合は、①を満たした時点で資格が取得できます。

なお、「必修科目」のうち、博物館実習については、学内での講義のほか、博物館や美術館等で実習を行う必要があります。

※詳細は文芸学部履修の手引を参照してください。

・学芸員資格取得までの流れ

1年次

- ① 学芸員課程登録説明会（3月）
- ② 博物館学芸員課程費（5,000円）納入

2年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録（3年次に「博物館実習」を履修するためには、学芸員課程必修科目のうち「博物館概論」および「博物館教育論」を含む8単位の修得が必要）
- ② 博物館実習先開拓ガイダンス（10月～11月）
- ③ 博物館実習先の開拓
- ④ 博物館実習 次年度履修許可者発表（3月）

4年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録
- ② 学芸員資格取得者発表（3月）
- ③ 学芸員資格証明書交付（学位授与式の日に教務部にて配付）

3年次

- ① 学芸員課程科目の履修登録

そ の 他

学芸員資格取得の最大の関門となるのが博物館実習です。博物館実習先については、各学生の希望に基づき、学内選考や各館園での選考の後、決定されます。事前に様々な館園を訪問し、特色や展示方法を学ぶとともに、履歴書の書き方や自己PR、志望動機など事前に準備しておきましょう。

卒業生の主な就職先

（博物館・美術館等文化財関係施設）

北海道立帯広美術館 北海道立近代美術館 北海道立函館美術館 青森県立郷土館 榎方志功記念館 八戸市美術館 宮城県美術館 秋田県立博物館 木の博物館吉成銘木店 郡山市立美術館 みちのく民俗文化研究所 茨城県近代美術館 小杉放菴記念日光美術館 栃木県立博物館 栃木県立美術館 群馬県立自然史博物館 群馬県立館林美術館 群馬県立歴史博物館 高崎市美術館 朝霞市博物館 うらわ美術館 川口市教育委員会 川崎市立博物館 埼玉県立近代美術館 埼玉県立歴史と民俗の博物館 宮代町郷土資料館 我孫子市教育委員会 国立歴史民俗博物館 千葉県教育委員会 千葉県立中央博物館 千葉県立美術館 千葉県立房総のむら 船橋市教育委員会 八千代市立郷土博物館 出光美術館 大倉集古館 太田記念美術館 小川美術館 国文学研究資料館 国立西洋美術館 汐留ミュージアム 渋谷区立松濤美術館 杉並区郷土博物館 静嘉堂文庫美術館 世田谷区立郷土資料館 世田谷区立次大夫堀公園民家園 泉屋博古館東京 タイムドーム明石（中央区立郷土天文館） 大東急記念文庫 たばこと塩の博物館 東京国立近代美術館 東京国立博物館 東京ステーションギャラリー 東京都江戸東京博物館 東京都写真美術館 東京都庭園美術館 東郷青児記念 損保ジャパン日本興亜美術館 中富記念くすり博物館 日本書道美術館 ニューオータニ美術館 根津美術館 練馬区立美術館 八王子市郷土資料館 府中市郷土の森博物館 府中市立美術館 アーティゾン美術館 文化庁 松岡美術館 三井記念美術館 目黒区美術館 山種美術館 厚木市郷土資料館 神奈川県立歴史博物館 鎌倉国宝館 鎌倉市鎌木清方記念美術館 川崎市市民ミュージアム 川崎市立日本民家園 そごう美術館 松前記念館 玉川文化財研究所 平塚市博物館 横浜美術館 福井県立若狭歴史博物館 清春白樺美術館 山梨県立博物館 池田満寿夫美術館 諏訪市美術館 長野県信濃美術館 長野市立博物館 岐阜県現代陶芸美術館 岐阜県美術館 上原美術館 MOA美術館 静岡県立美術館 愛知県美術館 豊田市美術館 佐川美術館 滋賀県立琵琶湖博物館 アサヒビール大山崎山荘美術館 京都国立近代美術館 泉屋博古館 大阪市立東洋陶磁美術館 大阪市立美術館 能楽資料館 萩野美術館 倉敷市教育委員会 海の見える杜美術館 広島市現代美術館 ふくやま美術館 愛媛県美術館 高島華宵大正ロマン館 香川県教育委員会 香川県立ミュージアム 出光美術館門司 熊本県教育庁教育総務局文化課 熊本市現代美術館 熊本市立熊本博物館 八代市立博物館 大分県立歴史博物館 沖縄県教育委員会 那覇市歴史博物館

令和4年度 博物館実習依頼館園

神奈川県立歴史博物館 群馬県立近代美術館 古代オリエント博物館 相模原市立博物館 下関市立美術館 新宿区立新宿歴史博物館 多摩美術大学美術館 千葉県立関宿城博物館 千葉県立美術館 東京富士美術館 広島県立美術館 松戸市立博物館 山梨県立博物館

学芸員という職業

成城大学文学部教授
学芸員課程委員会幹事

岩佐光晴

学

芸員という職業を一言で語ることは難しい。博物館に就職した頃、中学時代の同窓会があり、出席していた友達に学芸員として博物館に就職していると言っても、なかなか理解してもらえなかったことを記憶している。そもそも博物館（以下、美術館も含む）というものがどのような職場なのかすら十分に理解されていなかったように思う。もっともこれは三十年以上も前の話で、学芸員という職業に対する認知度が社会的にまだまだ低かったことにもよるが、その事情は今も大きくは変わらないように思われる。

巻頭 言

「博物館法」によると「学芸員は、博物館資料の収集、保管、展示及び調査研究その他これと関連する事業についての専門的事項をつかさどる。」とある。これを一般の人が読んだ場合、何となく意味はわかっていてもその内容についてはなかなか理解が及ばないのではなからうか。

「収集」は、文化財を対象とする場合、その多くが購入によるが、所有者から寄託されたり、寄贈されたりすることも多い。それを実現するためには所有者とのやり取りから始まり、何度かの会議を経て、事務手続きまで、多くの作業が必要となる。「保管」は、収蔵庫内での状態の把握のみならず、展示をしている場合には展示場内での、貸与していた場合には戻ってきた時の状態チェックも重要な仕事になる。文化財はどのように大切に保管していても経年劣化は免れず、傷んだものについては修理を行う必要がある。修理は専門の修理業者に依頼することになるが、そのための監督業務も保管に含まれる。「展示」は、常設の展示と特別に企画された展覧会に分かれる。展覧会の場合、企画から展示作品の選定に始まり、出品のための交渉、図録の原稿執筆、作品の集荷、展示、展覧会終了後の作品の撤収、返却までが展示業務に含ま

れる。「調査研究」は、主に収蔵品が対象になるが、その他、学芸員個人の研究テーマに基づくもの、所属館が独自に行うもの、展覧会の準備のために行うものなどその内容は多様である。その成果は論文や展覧会図録、学会での口頭発表などで公表することになるが、学芸員は研究者としても重要な役割を果たしているのである。

このように、「収集」、「保管」、「展示」、「調査研究」と言っても、その内容は多岐にわたり、学芸員の仕事を一言で説明することの難しさがわかるだろう。さらにこれらとともに「その他これと関連する事業」にも携わることになる。その事業の代表的なものが教育普及と広報である。博物館は学生にとっては学びの場であり、社会人にとっては生涯学習の場ともなっている。それをサポートしていくのも学芸員の重要な仕事となっている。ギャラリートークや講演会、講座などがそれに当たるが、最近では親と子を対象としたワークショップなど様々なイベントが企画されている。広報は、いろいろなメディアを通じて博物館で行われている展示、講演会や講座などの活動を社会へ幅広く発信していくもので、学芸員はそのための原稿を執筆したり、説明の場を駆けり出されることになる。

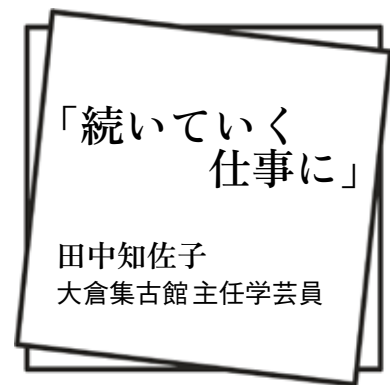
以上が学芸員の仕事の主なものになるが、その内容は多種多様で、学芸員を揶揄して「雑芸員」と呼ぶ所以である。学芸員は状況に応じて一人で何役もこなすことになるのである。しかも、博物館は多くの場合、休日も開館しているの、（よみ）暦通りには休めず、勤務体制も変則になることが多い。このように見てくると、学芸員は何とも過酷な職業と思われる。しかし、よい展示をすると来館者に喜ばれ、所有者にも喜ばれる。ギャラリートーク、講演会や講座でよい内容の話をすると参加者に喜ばれる。個人的な研究もそのための重要な要素となっていく。これは何にも代えがたい学芸員として仕事をすることの喜びともなっていることは確かである。それは、学芸員の仕事が文化財を通して社会や人々と密接に関わっていることによるのであろう。

本学に学芸員の資格を取得するための学芸員課程が設置されてから、来年度（二〇二三年度）でちょうど五十年になる。その間、本学からは優秀な学芸員が数多く輩出され、現在も全国で活躍している。この節目の年に、本学出身の現役の学芸員の方々をお迎えして、高校生や在学に向けて学芸員という職業の魅力と社会的な役割について考えるシンポジウムを現在企画しているところである。

この文章を読んでくださる皆様は、学芸員という仕事にどんなイメージを持っていらっしゃるのでしょうか。

わたしは、成城大学に学部から大学院の博士課程後期まで在学し、東洋美術史のゼミを専攻しました。中国美術史の研究のために、北京大学にも留学し、そのまま専門分野の研究を続けたいと考えていた二〇〇五年に、非常勤職員として働いていた博物館の上司から、現在の勤務先への就職を勧められました。正直なところ、自分が学芸員になるとはあまり想定していなくて、先輩たちの勤務先として美術館や博物館の名前がよく話題に上るために、身近に感じる職業ではあったものの、それ程深く考えずに就職してしまっただけというのが実情でした。ただ、当時も今も採用の新規募集が少ない中で、在学中に辛うじてこの仕事につけたことは有り難いことだったと感謝しています。

就職した美術館は、学芸員が事務や受付業務までこなすような財団法人（後に公益財団法人）の小規模な私立美術館で、それまで勤務していた大きな博物館と



は全く環境が違っていました。とはいえ、展覧会を企画して運営していくやり方は、規模の差はあっても同じと前向きに捉えて、着任から二ヶ月後にスタートする展覧会をいきなり引き継いで、何とか開催に漕ぎ着けました。学芸員の人数も常に二から三人くらいでしたので、その後も年間に少なくとも二回、多い時には五回もの展覧会を担当するハードな日々を過ごしました。合間には、グループ会社のホテルで毎年開催されていた絵画展への協力、全国各地で行なっ



た名品展の巡回など、目まぐるしい時間の中でひたすらアウトプットを続ける毎日でした。

おそらく多くの学芸員が抱えている悩みだと思えますが、展覧会を慌ただしくこなす事が続くと、アイデアや情熱が枯渇してしまうという問題があります。そういう時、学生時代に先生方から受けた薫陶、留学先で接した芸術から貰った感動の数々に、幾度となく救われたと思います。アルバイトばかりしていて、真面目だったと胸を張れる

ような学生生活ではなかったものの、長かった在学期間は自分にとって豊かな糧となっていたと後になって気付かされました。

また、小さな美術館では業務が多岐に亘るといって大変であると同時に、展覧会に関わる業務全体を自分で把握できるという一面もあり、わたしにはそれが性に合っていたように思います。展示作業から広報まで、手を掛ければ掛けるほど、展覧会に対して愛着も湧くし、一緒に



仕事をする相手先や業者などとの信頼関係も築けます。限られた人数の中で展覧会を回していくには、そうした外部の人達との協力が不可欠だと思います。

また、お客さんからの質問や、交通案内などの電話にも直接対応しますから、ちよつと面倒に思う部分もありつつ、彼らからの生の反応をダイレクトに接することが出来たのは面白かったです。何より、一通り自分でやれるようになる、どんな展覧会が来ても何とかなるだろうという度胸も付きますので、それはそれで良い経験となったように思います。

そうして休みなく十年ほど働いた頃に、ホテルの建て替えに伴い、当館も大規模な増改築を行うことになり、五年半の長期休館に入ることになりました。それまでずっと回り続けていた車輪が急停止することになり、ほつとすると同時に、大きな不安に駆られました。尊敬する学芸員の先輩の方も同じことを仰っていたのですが、ずっと展覧会をやって来て、それが無くなると思うととても焦るような気持ちになるのです。とは言え、

せつかくの休館期間ですから、それまでできなかったインプットを心掛けようと気持ちを切り替えました。

休館中は、収蔵庫の建て替えのために収蔵品を移動させたり、作品のデジタル撮影やデータベース作成、常設で屋外展示していた仏像の修理など、開館時には出来なかつた業務に従事しました。また、新しい建物をどうしていくか、建築設計事務所や建設会社、さまざまな業者と、多くの打ち合わせを重ねました。五年半という期間には、思っていた以上に世の中が目まぐるしく変化しており、特にインターネット環境の整備は必須となりました。古き良き時代の雰囲気が残るような、どこかのんびりしたところは、当館の良さではありましたが、そうした意識のブラッシュアップを全体で共有していくのが一番大変だったと思います。

そして、工事の終わった二〇一九年に開催された、リニューアル・オープンの記念展覧会を担当出来たのは得難い経験となりました。自分としては、展覧

会の担当業務に五年半のプランクがあるだけでも心配な中、リニューアルによるインパクトを世間に周知させねばならないという大きなプレッシャーを抱えて、これを無事に終えるまで只管必死で走り抜けたという記憶しかありません。多くの方々のお力添えのお陰で開館記念展が無事に成功し、これからまた展覧会に追われる日々が来るのかと漠然と考えていた矢先に、今度はコロナ渦という予期せぬ事態がやって来しました。

当初こそ当館も休館しましたが、長引く内には基本的に開館を続けることになり、今度は集客という点で初めて経験する難しさに悩みました。改めて思ったのは、お客様から千円を超え入場料を払って貰う事は、なかなか容易ではないということです。当館には隣接するホテルからの来館者が多いという大きな特色があり、客層も年配の富裕層、特に女性が多い傾向があります。それが強みでもありませんが、コロナ渦ではホテルも集客に苦しみ、当然こちらもその煽りを受けました。とはいえ、当館から個性的で魅力ある展覧

会を発信出来れば、一般の美術ファンや若年層を呼び込んで、逆にホテルへのお客様の流れも生まれます。未曾有の難局において、そうした展覧会を幾つか手掛けられたのは、不幸中の幸いでした。

現在は、リニューアル時から走り続けた期間が一段落し、これからどのように働いていくか、立ち止まって考える時間に入っているかなと個人的には思っています。展覧会には、良くも悪くもそれに関わる期間が終わると、そこで終了、という寂しさがあります。そのため、自分の人生の中で続いていく仕事がしたいと常々考えて来ました。その一つが、大倉財閥の二代目である大倉喜七郎が考案・制作した縦笛オーケラウロ（尺八とフルートのハイブリッドのような楽器）の再生プロジェクトです。もとはと言えば、二〇一一年に企画・担当した、喜七郎の音楽関係の業績を再顕彰する内容の展覧会の中で、イベントとしてコンサートを行った事が切掛けでした。戦後に廃れて忘れ去られていたオーケラウロを、慣れない楽器の演奏を快く引き受けてく

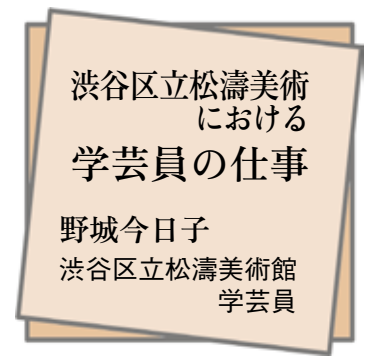
れた尺八奏者たちと再生し、現在までに三枚のオリジナル・アルバムと、一冊の書籍を刊行しました。また、コンサート活動も続けながら、コロナ渦を乗り切って、昨年には無事に十周年を迎えることが出来ました。

このほかにも一つ、今取り組んでいるのが、一九三〇年に喜七郎が全面支援し、ローマで開催された「日本美術展覧会」に関する調査研究です。団長を務めた横山大観はじめ、川合玉堂、竹内栖鳳ら当時の画壇の錚々たる画家たち八十名が参加した大プロジェクトでした。この展覧会と、パトロンとしての喜七郎に対して、近年イタリア側からも関心が寄せられており、昨秋には渡伊して公文書や絵画などの調査を行い、現地の関係者らとの交流も深める機会に恵まれました。ローマ展開催から百年となる二〇三〇年に向けて、協力してくれるメンバーらと共に研究成果を形に出来たらと願っています。

ところで、このように美術館に勤務していると、自分の専門とは別に、仕事として様々な分野

に手を広げることが求められるような場面が増えます。ただし、やはり学生時代に恩師から教えを受けた中国美術史こそ自分の研究のベースであり、これからもそれを忘れずに細くでも関わり続けることを心掛けて行きたいと思えます。

さて、最初の問いかけに対して、この文章が果たして答えになっているか分かりませんが、この連載の中に登場する学芸員の一例としてお読み頂けたならば幸いです。



渋谷区立松濤美術館は、渋谷の喧騒から離れた住宅街、松濤の地に建てられた小さな美術館です。一九八一年に開館し、二〇二一年には開館四十周年を迎えました。建築家の白井晟一（一九〇五～一九八一年）が設計した建築が特徴です。

当館は、閑静な住宅街の中に建てられたこともあり、敷地面積は約一〇三四㎡と限られています。展示室を二室もうけています。二階の展示室であるサロン・ミュージゼは、床に絨毯、壁面にベルベットが張られ、中央には白井が自ら選んだ大きなソファアが置かれています。また、天井高も約三mと低く、まるで邸宅でくつろぐように美術鑑賞ができる空間となっています。反対に、地下一階の展示室は、天井高が六mあるオープンな空間となっています。実は、当初、窓から外光の入るような設計となっていました。

た。現在は、窓は仮設壁でふさがれています。現在は、窓は仮設壁でふさがれていますが、それでも十分、解放感のある展示室となっています。

当館はこのように小さくて個人的な建物の特徴の美術館ですが、他のミュージアムと同じく、美術館としてのミッションがあります。

ひとつめのミッションは、展覧会の企画・開催です。当館では、一年に四回程度の特展と、渋谷区の在住・在勤・在学の方々を対象にした公募展、そして公募展と同時開催でサロン展と称する小展示の合計六回の展覧会をおこなっています。特別展やサロン展は、学芸員全員で企画を出しあい、内容を協議するところからはじまります。いちから内容を企画し、当館だけで開催する展覧会から、全国の複数箇所で開催する展覧会まで、さまざまアイディアを出しあい、意見交換を重ねて展覧会の開催を決定します。

当館は、ホワイトキューブを主とした多くの美術館とはまったく異なる建築であることから、展覧会を企画する際は、展示構成や展示方法に工夫が必要で。しかし、この空間だからこそできる展覧会を考案することが、学芸員としての腕の見せ所でもあります。

また、担当の展覧会が決まると作品の交渉から、作品調査、図録の作成、会場の造作や、チラシやポスター

や看板の作成など、開催までに関わるさまざまな仕事に従事します。無事に展覧会が開催できるように、同時多発的に起こる大小さまざまな仕事をこなす日々が近づきます。

例えば今年度、当館は、奈良国立博物館の協力により実現した「SHIBUYAで仏教美術 奈良国立博物館コレクションより」展にはじまり、夏季には画家・津田青楓の図案家としての側面に注目した「津田青楓 図案と、時代と」展を開催しました。そして、秋にはヤマトタケルからドラッグクイーンまでの日本の異性装をあつかった「装いの力―異性装の日本史」展を開催しました。これらは、当館の学芸員が独自で開催した展覧会です。そして、冬季は、巡回展「ビーズ―つなぐかざる みせる 国立民族学博物館コレクション」展を開催しました。巡回展とはいっても、当館ならではのコンセプトや会場構成などを国立民族学博物館とともに協議しながら、展示をつくりました。

こういった展覧会業務から、夏休みには「子ども美術教室」の開催や、学芸員実習と近隣中学校の職場体験の受け入れなどの教育普及活動もおこないます。当館では、学芸員実習や職場体験の際は、各学芸員がそれぞれ講義をするなど、学芸員総出で対応しています。

そして、お客様からはみえにくいミッションとしては、収蔵品の保存と活用があげられるでしょう。当館は、約一四〇〇点におよぶ、さまざまな分野の作品を収蔵しています。昨年度は、四十周年を記念して収蔵品目録を刊行しました。作品情報を公開することは、他館から作品を借用してもらえらるチャンスを増やすことにつながります。すなわち、当館以外の場所でも、より多くのお客様の目にコレクションが触れることとなるのです。

また、当館でもサロン展で収蔵品を展示し、区内外のお客様にコレクションの存在を知っていただく機会をもうけています。

今年三月二十二日（水）より開催したサロン展「写真のノスタルジア」では、戦前期に活躍したアマチュア写真家による団体「写真芸術社」の写真作品を紹介しました。また、同時開催の特別陳列「関東大震災のイメージ」では、今年一〇〇年を数える関東大震災を描いたコレクションを展示しました。

学芸員は、このようなミッションを遂行する重要な仕事です。お客様が美術と出会う場所をよりよく提供できるように、館職員一丸となって努力を重ねる日々を過ごしています。

ぜひ、渋谷にお越しの際は、渋谷区立松濤美術館にお立ち寄りください。

小島孝夫

学芸員課程の今年度の出来事を報告しておきたい。民俗学研究所の特別展の開催にむけて、民俗学研究所と学芸員課程の博物館実習（民俗学）とが協業することが試みられた。

成城大学の学芸員課程開設は1973（昭和48）年に当時の文部省から認定を受けているが、認定要件の一つとして実習のための施設を備えることが求められていた。その実習施設として位置づけられたのが、同年に創設された民俗学研究所の展示室であった。成城大学では2年前に専用の学芸員課程実習室ができるまで、実習の授業は一般教室で行われており、民俗学研究所と連携して展示等の実習を行うことができない状況が続いていた。展示に関する実習は学外での博物館実習（館園実習）に委ねられることが多かった。2年前から博物館資料の取り扱い等の実技指導が学内でも実施できるようになり、博物館実習実務としての展示作業の実施の機会が模索されることになり、民俗学研究所との間で検討が行われることになった。



民俗学研究所は毎年11月に、柳田國男に関する特別展と収蔵郷土玩具を題材とした特別展とを隔年で開催しており、今年度は収蔵郷土玩具を題材にした特別展を開催することになっていたため、今年度の特別展に学芸員課程の博物館実習（民俗学）が参画することを前提に学芸員課程との調整を開始した。研究所には約3900点の郷土玩具が収蔵されており、これらを展示資料として展示テーマや展示構成を検討していくことになった。民俗学研究所と学芸員課程の博物館実習（民俗学）担当の丸尾依子非常勤講師との間で前期開講中に展示テーマと展示構成が協議され、展示テーマは「郷土玩具歳時記—四季のくらしと祈り—」とし、各地で製作された素朴な郷土玩具に象られた一年間のくらしの成りたちや季節ごとの遊びを題材にして、当該地域の日常生活や日常生活の安寧を祈り願う心意を紹介することになった。

夏季休暇中に受講生たちは展示パネルの作成準備をすすめ、後期が開講すると研究所では展示資料の選定を行い、単元構成の確定をしパネル原稿や展示解説書原稿の作成を行い、両者の協業を経て11月3日に特別展を開催することができた。会期は12月22日までであったが、その間も毎週の授業で提示表現等についての検討を行い、展示内容の改良に努めることになった。加えて、展示期間終了後の授業では、当該郷土玩具の点検作業や展示ケース等の清掃作業が行われた。今年度は試行的に博物館実習（民俗学）の実習として展示を行ったが、受講生たちにとっても有意義な経験になったようである。博物館実習の全受講生が参画できるようにするためには多くの課題があるが、民俗学研究所との協業の試みを継続できるように検討をすすめていきたい。

今年の11月25日（土）には成城大学で2023年度全国博物館学協議会東日本部会が開催される予定である。学芸員課程を有する全国の大学で構成されているのが「全博協」で、その東日本部会が開催されることになった。参加者は会員校の学芸員課程専任教員と事務職員に限られるが、学芸員を養成する課程関係者にとって有意義な研修機会となるよう、研修テーマ等の検討や諸準備をすすめていきたい。

【編集後記】

他の類似した雑誌と比して、飾らない現場の学芸員の生の声を学生諸氏に届けられればと思うのが、創刊以来のひそかな思いであり、ゆるやかながら7号の刊行となり、少しは届いているのかとぼんやりと考える。博物館法改正にともない、ミュージアムがそして、学芸員に求められるもの、要求されるものがどのように変わるか未だ不透明であり、どのようにかわるのだろうか。ミュージアムに関わる学芸員は自身の仕事をそれぞれの言葉と尺度で説明する。巻頭言で岩佐先生のいう、一言では説明しにくい仕事の多様さをなんとか、簡潔にそして、それが伝わらないことを知り、説明することを諦めてしまうこともある。一言では難しいならば長くても、伝わる方がいいだろう。本号は、田中氏、野城氏からそれぞれの学芸員として立場から仕事について現場の率直な想いを聞けたのではないだろうか。近頃はラジオやインターネットなど、学芸員がメディアに登場する機会も増え、以前に比べ職業としての認知度は少しはあがっただろう。学芸員課程委員会としても、より具体的に仕事がイメージできる内容を次号以降も学生諸氏に伝えていければと思う。(Y)

成城大学学芸員課程ニュースレター vol. 07
Seijo University Curator Course NewsLetter

発行：成城大学学芸員課程委員会
157-8511 東京都世田谷区成城6-1-20
TEL 03-3482-9045
mail: gakugei_nl_s@seijo.jp
編集担当 吉井大門 篠原 聡
2023年3月31日発行